



「就業力」と大学教育

今年も、大学三年生が就職活動をする時期に入りました。秋の深まりとともに、学生たちは、就職活動のことを否応なく意識させられています。

と、現状の就職活動の慣習に倣って述べましたが、企業による新卒者の採用活動が現在のように卒業年次前にまで前倒しされている状況に、大学関係者から多くの批判が出ていていることはご承知のことでしょう。バブル経済が崩壊すると共に、「リクルーター制度」のような企業が学生を買いにくる採用活動ではなく、学生が自らを売り込む、大学入試のごとく企業を受験するという状況ができ

あがりました。同時に、企業による能動的な青田買いを防止していた就職協定自体が無意味なものとなり、堂々と一斉に採用活動を早める別の意味での青田買いが行われるようになりました。

学生が企業を受験するということは、企業から見れば学生を選抜することでもありません。選抜には、何らかの基準があるはずで、例えば、例えれば文科省の言う「就業力」とか、経産省の言う「社会人基礎力」と言つたものかもしれません。しかし、「就業力」も「社会人基礎力」も、抽象度の高い概念です。経産省によれば、「社会人基礎

力」は、「企業や組織の中で、多様な人々とともに仕事をやっていく上で必要となる基礎的な能力」と定義されています。「コミュニケーション能力」や「協調性」、「バ

イタリテイ」といった能力を身につけよとは言わない、教える立場からすれば、そのようなものをどのような手法で教えるのか、(批判的)疑問が浮かんできます。意地悪な言い方をすれば、現在企業にお勤めの「勝ち組?」の方々は、そのような能力を持っているのか(若かりし頃持っていたのか)と苦言を呈したくもなります。にもかかわらず、企業はいや社会は、このような抽象的な能力を学生に付けさせる

よう、大学に否応なく求めてきます。

このような問題を突きつけられた大学は、どうすればいいのでしょうか。それには、二つの方向性があると言えます。まず、企業社会が突きつけてくる理不尽な慣習を改めさせることです。既に日本学術会議が、卒業後三年以内の既卒者は新卒扱いとして採用活動を行うよう、企業に求める提言をしています。この

ような流れの中で、大学と学生が企業に一方的に振り回される構造がなくなればいいのです。しかし、ジョン・レノンではありませんが、これはかなり「イマジン」なことでしょう。

もう一つの方向性は、大学側が「就業力」の育成を意識的に行うことです。「結局、企業や文科省の言いなりじゃないか」と思われるかもしれ

ません。ただ、誤解しないでほしいのは、「就業力」を育成するというのは、就職試験対策や、就職活動に役に立つマニユアルを与えることではありません。そもそも、「就業力」や「社会人基礎力」という概念自体が極めて抽象的なものなのですから、それをマニユアル化したり、即時的に使えるよう教えることなどできないはずで

では、一体何をすればいいのでしょうか。それは、大学で伝統的に行われている教育を見直し、その中に、実は「就業力」や「社会人基礎力」に関連することが含まれているのではないかと再考することです。初めはこじつけでも構いません。ありがちなことですが、ゼミナール形式の授業は、学生のコミュニケーション能力、表現力などを身につけさせるものでしょう。

論文やレポートを書かせる、その文章を添削するなどの指導は、文章表現力はもちろん、論理的な思考力や問題発見、解決力を身につけさせるものでしょう。もちろん、専門科目などにおける日々の授業や指導を、「就業力」や「社会人基礎力」を意識的に結びつけることは難しいと思います。しかし、結びつけるという意識を持つことが重要だと思われるのです。二年前、本センター主催で行ったFD講演会で、講師の戸田山和久先生(名

ご意見・ご感想・寄稿募集

『とりのこえ』では、みなさまからのご意見やご感想、共通教育(教養教育、初年次教育など)にまつわる話題や原稿などを募集しております。詳細は、本センター(4頁参照)までお願いいたします。

(一面より続く)

古屋大学教授)が、身近な教育活動についてざっくばらんに話し合ったりすることをFD活動とみなそう、という主旨の話がされていました。「就業力」についても、身近な教育活動を振り返りながら、それをいかに結びつけていくのかというFD活動も、同時に必要となるでしょう。このような教育活動を、ここでは「間接的な就業力育成教育」と呼んでおきます。

しかし当然のことながら、各教員の授業や指導では、直接、職業や労働、キャリア形成に関する内容を扱うことはできないでしょう。そこで、別枠として、キャリア形成をテーマにした授業が必要なのです。それが、本センター管轄科目である「キャリアデザイン科目群」です。これを、「直接的な就業力育成教育」

と呼んでおきます。大学に、キャリアデザインを直接テーマとして扱う授業が必要なのかという批判もあるでしょう。しかし、学生が社会の中で自らの力で生き抜くことを考える場を提供することは、教育機関である大学に課せられているミッションです。それを、学

全学共通教育科目

「懇談会」開催

一〇月一日(金)、全

学共通教育科目の担当教員(専任・非常勤)が一堂に会した「情報交換会」が、本学七号館地下ラウンジで行われました。津上英輔共通教育研究センター長、油井雄二学長の挨拶の後、浅井良雄共通教育運営委員長による乾杯で、歓談が始まりました。参加者は約六〇人で、盛況のうちに終了しました。

部や学科単位でのカリキュラムに納めることは物理的に難しいからこそ、別枠として設置する意義があるのです。直接的、間接的、双方の就業力育成ということ、車の両輪のごとくバランスよく動かし、大学の建学の精神や特徴に見合った大学独自の「就業力」を確立していくことが、大学における就業力育成において必要なことだと考えられます。

本センター管轄のキャリアデザイン科目群の再編はもちろん、新しい組織の整備等も着々と進んでいます。キャリア支援部が中心となって取り組んできたキャリアデザイン科目群、キャリアサポートプログラムMAP(My Advanced Project)で培われた成果をさらに発



中締め：杉本教務部長



乾杯：浅井運営委員長



挨拶：油井学長



挨拶：津上センター長



か。(経済学部・阿部勘一)

「総合講座II」へ感動を創るから生まれた

『アート・プロデュースの現場』

成城大学では、現在、アート・シーンに関わる共通教育科目の一つとして「感動を創る」が開講されています(後期・木曜五時限)。私は、昨年度よりこの講座の担当者であり、かつ、コーディネーターも担っています。当該科目の趣旨は、アートとビジネスが相互浸透する状況を踏まえ、感動を創る芸術・アートの社会性を理解し、人文科学と社会科学の交差点ともいえる、アート・プロデュース&マネジメントの意味、アートとしてのエンタテインメント産業をいくつかの視点から考察することです。そして、音楽・演劇、展覧会、展示会、ファッションショーなどの様々なイベント事例をとりあげ、創造と運営、プロデュース&マネジメントの役割と対象を様々な

本年八月、昨年の総合講座IIの講義内容をもとにした『アート・プロデュースの現場』が刊行されました。本書では八つのテーマをとりあげていますが、それぞれについて簡単に紹介します。

一鑑るアートから買うアートへ
山本冬彦(アート・ソムリエ)
アートの生産者・販売者・ユーザーの現状、アートソムリエの活動、ギャラリートゥアーと若手作家発表の場づくり、無名の作家を買うことの意義などが述べられる。

二演劇をプロデュースすること
と公共劇場から考えること
奥山緑(演劇プロデューサー)
プロデューサーが気にすること、なぜプロデューサーになろうと思ったか、公共の劇場、演劇の現場で働く人、プロデューサーに必要なもの、目指すもの、具体的なプロデューサーの仕事

などに言及される。

三、聴く衣裳、効く衣裳
西原莉憲(舞衣衣裳デザイナー)
衣裳の世界に入るきっかけ、聴く衣裳・効く衣裳の意味について語られる。

四 大衆を創る: テレビにおける「プロデューサー」論
阿部勤(経済学部准教授)
テレビ放送の位置と意味、テレビ制作者たちのテレビ論、大衆のあり方などが論じられる。

五、演奏様式と社会
小林義武(文芸学部教授)
宮廷、教会、市民、演奏様式、記譜法の違い、楽器の違い、ピッチ、奏法の違い、解釈の違い、合唱団の構成などに言及される。

六、能の勧進 今昔
梅若靖記(能楽観世流シテ方)
能に見られる「勧進」、能の公演と時代変遷、能のプロデュース、海外公演に必要な知識、プロデューサー創り、人脈作

りなどが詳しく記される。

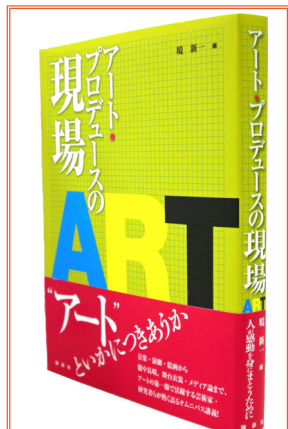
七、伝承と発展
六世・杵家弥七(長唄杵家派家元)
長唄概説、文化譜の創造、新渡戸稲造との出会い、「季座」の目指すもの、教育指導要領の改訂、伝承と発展の意味について総括される。

八アート・プロデュース&マネジメントへの誘い
境新一(経済学部教授)
私自身のイベントプロデュースの経験を踏まえ、アート・プロデュース&マネジメントの理論的枠組みについての試論である。

今日、アートとビジネスは相互の関わりなしに存続しえませんが、アートはビジネスに、ビジネスはアートに影響を与えます。

ます。アートとビジネスの出会いには、究極のところ異分野の人々相互の出会いに尽きます。縁を結び、縁を尊び縁に随うことによって、人を感動させる価値の創造および提供がなされる、そしてプラスαとしていかなる価値を加えるかが重要です。プロデューサーは異次元のものを創造し、イノベーションを引き起こすトリックスターと言えるでしょう。

私は、彼らの並々ならぬ意欲にあふれた講義と学生の反応を鮮明に記憶しています。この科目が、今年度もまた、成城大学に学際的なチャレンジ、新たな一石を投げられれば幸いです。(経済学部・境新一)



★ 2009年度総合講座IIの内容を収録
境新一 編著
『アート・プロデュースの現場』論創社刊
定価：2,500円+税

【おわびと訂正】

ニュースレター第1号4ページ目掲載の「共通教育研究センターセンター員」の名簿について、経済学部増川純一先生のお名前が掲載されていないことが判明いたしました。この場を借りておわびすると共に、下記の通りセンター員名簿表を訂正させていただきます（再掲は訂正箇所のみとさせていただきます）。

共通教育研究センター センター員

(2010年度：学部別・50音順、氏名の後は所属部会)

センター長 文芸学部 教授 津上英輔

経済学部

准教授	阿部 勘一	教養 (教養・WRD・IT)
教授	小平 裕	教養 (キャリア)
教授・教務部長	杉本 義行	教職
教授	田中 誠一	体育
教授	中條屋 進	教養 (WRD)
教授	塘 誠	教職
准教授	中村 理香	教養 (教養)
教授	牧野 陽子	教養 (外国語)
教授	増川 純一	教養 (IT)

FD公開ワークショップ開催のお知らせ

本センターでは、来る二月四日(土)午後三時から、3号館三階大会議室で、公開FDワークショップを開催いたします。

本センターの科目で、あるWRD科目(「Write」)をお読みいただき、お話ししていただく機会を設けたいと考えています。本センターでは、公開FDワークショップを開催いたします。

二〇〇七年二月一日に、戸田山和久先生(名古屋大学教授)を講師にお招きして、FD講演会を開催しました。その後、FD委員によるFD講演会を開催しました。その後、FD委員によるFD講演会を開催しました。

FD講演会は、FD委員によるFD講演会を開催しました。その後、FD委員によるFD講演会を開催しました。

FD講演会は、FD委員によるFD講演会を開催しました。その後、FD委員によるFD講演会を開催しました。

姿勢として、一方的に知識を与えられるのではなく、学生が授業に主体的に取り組み、実践的な訓練を行うことを通して、三つの基礎的な能力を主体的に身につけていくことを目的としています。

が、学びの姿勢、特に「聞く」ことの重要性を中心として、授業は展開されているものを、問い、考えたことをいかにして書くかという、書くことに関する成果を上げるのはなかなか難しいのが現状です。書くことを教えると言いつつ、例えば句読点の打ち方、主語述語の一貫性など、枝葉末節な技術指導に終始しがちです。そのようなことに終始することなく、「問う」「考える」として連動させながら書くことを教育することが必要です。

ただ、それをどう教えるのか、文章化、言語化するものの教授法には悩まされるところです。今回のFDワークショップは、そのような点を踏まえ、「表現教育の可能性」というテーマを設定しました。ワークショップのパネリストには、石黒圭先生をお迎えします。石黒先生は、一橋大学国際教育センター・大学院言語社会科学研究科の准教授で、専門は日本語学、文章論です。著書に、日本語の文章理解過程における予測の型と機能(ひつじ書房)、『よくわかる文章表現の技術I-V』(五冊)ともに明治書院)、『読む技術―速読・精読・味読の力をつける』(文章は接続詞で決まる(光文社新書)、ほか多数あります。石黒先生には、文章論の立場からレポート、論文を書くための教授法、表現教育について

今回のFDワークショップは、そのような点を踏まえ、「表現教育の可能性」というテーマを設定しました。ワークショップのパネリストには、石黒圭先生をお迎えします。石黒先生は、一橋大学国際教育センター・大学院言語社会科学研究科の准教授で、専門は日本語学、文章論です。著書に、日本語の文章理解過程における予測の型と機能(ひつじ書房)、『よくわかる文章表現の技術I-V』(五冊)ともに明治書院)、『読む技術―速読・精読・味読の力をつける』(文章は接続詞で決まる(光文社新書)、ほか多数あります。石黒先生には、文章論の立場からレポート、論文を書くための教授法、表現教育について

今回のFDワークショップは、そのような点を踏まえ、「表現教育の可能性」というテーマを設定しました。ワークショップのパネリストには、石黒圭先生をお迎えします。石黒先生は、一橋大学国際教育センター・大学院言語社会科学研究科の准教授で、専門は日本語学、文章論です。著書に、日本語の文章理解過程における予測の型と機能(ひつじ書房)、『よくわかる文章表現の技術I-V』(五冊)ともに明治書院)、『読む技術―速読・精読・味読の力をつける』(文章は接続詞で決まる(光文社新書)、ほか多数あります。石黒先生には、文章論の立場からレポート、論文を書くための教授法、表現教育について

今回のFDワークショップは、そのような点を踏まえ、「表現教育の可能性」というテーマを設定しました。ワークショップのパネリストには、石黒圭先生をお迎えします。石黒先生は、一橋大学国際教育センター・大学院言語社会科学研究科の准教授で、専門は日本語学、文章論です。著書に、日本語の文章理解過程における予測の型と機能(ひつじ書房)、『よくわかる文章表現の技術I-V』(五冊)ともに明治書院)、『読む技術―速読・精読・味読の力をつける』(文章は接続詞で決まる(光文社新書)、ほか多数あります。石黒先生には、文章論の立場からレポート、論文を書くための教授法、表現教育について

第二回WRDプレゼンテーションコンテスト開催のお知らせ

前回の本紙で詳細をお知らせした通り、今年度もWRDプレゼンテーションコンテストを開催することとなりました。今年度は、五クラスから七チームのエントリーがありました。

WRD科目の授業成果を、是非ご覧下さい。

問題提起として講演していただきます。講演を踏まえた上で、コーディネーター・聞き手の東谷文芸学部准教授と石黒先生との議論、そして参加者の方々の議論を通して、表現教育の可能性について考えたいと思います。

★第二回WRDプレゼンテーションコンテスト
日時：二月八日(土) 一三時～一八時
会場：3号館階322教室

※このテーマから各チームが自由にテーマ設定をして二五～二〇分程度のプレゼンテーションを実施します。

講演者：一橋大学国際教育センター・大学院言語社会科学研究科准教授 石黒 圭 氏
コーディネーター・聞き手：文芸学部准教授 東谷 護 氏

★FD公開ワークショップ
「表現教育の可能性」
日時：二月四日(土) 一五時～一七時三〇分
会場：3号館三階大会議室

★第二回WRDプレゼンテーションコンテスト
日時：二月八日(土) 一三時～一八時
会場：3号館階322教室

※このテーマから各チームが自由にテーマ設定をして二五～二〇分程度のプレゼンテーションを実施します。

問題提起として講演していただきます。講演を踏まえた上で、コーディネーター・聞き手の東谷文芸学部准教授と石黒先生との議論、そして参加者の方々の議論を通して、表現教育の可能性について考えたいと思います。

『とりのこえ』

成城大学 共通教育研究センター
ニュースレター 2010年度 第2号
(2010年12月1日発行)
発行責任者：津上 英輔
編集担当：阿部 勘一
成城大学 共通教育研究センター
〒157-8511 東京都世田谷区成城 6-1-20
Tel: 03-3482-9556 Fax: 03-3482-9053
e-mail: kyotsu@seijo.ac.jp